

修士論文（要旨）
2013年1月

台湾人日本語学習者における日中同形語の認知度

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3019
連國鈞

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究動機・背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	台湾の言語使用状況と中国語への影響	3
2.2	台湾の中国語と中国の中国語	5
2.3	日中同形語の定義	7
2.4	日中同形語の存在理由	8
2.5	日中同形語数	9
2.6	日中同形語に関する先行研究	10
2.7	先行研究の問題点	13
2.8	本研究の位置づけ	15
第3章	日中同形語に関する認知度調査	16
3.1	語彙選択基準と理由	16
3.2	調査1：語彙意味確認調査	17
3.3	調査2：日中同形語認知度調査	23
3.4	フォローアップインタビュー調査	29
第4章	調査結果分析	30
4.1	分析方法	30
4.2	分析結果	30
4.3	分析結果まとめ	53
第5章	対面アンケート調査	57
5.1	対面アンケート調査1	57
5.2	対面アンケート調査2	63
第6章	おわりに	72
6.1	総合的考察とまとめ	72
6.2	今後の課題	76

謝辞

参考文献

参考サイト

資料

研究動機・背景

台湾の公用語は中国語のため、全ての表記に漢字が使用されている。これにより、台湾人は日本語を学習する際、他の学習者に比べ、漢字を学習しやすく、文章を読む際、漢字があれば意味が類推できる。しかし、日本語と中国語の漢字が同じように書かれたとしても、意味がすべて同じというわけではない。特に日中同形語が少なからず存在するため、母語から直訳した表現が多く見られ、誤用が現れやすくなる。

稿者の学習経験からみても、日中同形語の誤用は一般的であるが、学習者自身には日中同形語の誤用を犯した自覚がない。したがって、台湾人日本語学習者において、日中同形語の誤用が減少しない原因を探るためには、まず、日中同形語に関する認知度の調査が必要だと思われる。同じ漢語の含まれた文であっても、文脈によって日中同形語に関する認知度の判断も異なると推測するため、本研究では日中それぞれの文脈を基に調査を行う。そして、日中同形語の誤答と正答との間の関係、および影響を明らかにしたい。さらに、日中同形語に関する学習状況や、誤答を引き起こす過程なども調査する。

調査結果

本調査の結果を見ると、認知度が高い文脈は「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」が多い。一方、認知度が低い文脈は「日本語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」と「中国語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」が多い。しかし、逆のケースもないわけではない。このことから、同一の漢語熟語文であっても、文脈によって認知度が異なることが明らかになった。また、分析により、何が誤答と正答に影響を与えたかを解明した。

そして、稿者は本研究を行う前に、誤用が起りやすい（認知度が低い）日中同形語が存在する一方で、母語の知識を利用しながらも、誤用が起りにくい（認知度が高い）日中同形語もあるのではないかと推測した。しかし、本研究の調査結果から、学習者にとっては同じ漢語で作った文であっても、文脈によって日中同形語に関する認知度の判断が異なることが明らかになった。つまり、ひとつの単語で認知度の高低を判定するのは難しいと考えられる。単語の調査に加え、日中それぞれの文脈の調査も合わせれば、日中同形語の認知度または習得度について、より信憑性の高いデータが得られよう。

次に、日中同形語の学習経験が実際に少ない、あるいは少ないと感じている学習者が多いことが示された。また、学習経験があったとしても、授業の中で少し取り上げられるのみであり、教えてもらった日中同形語の例も少ないと認識している。さらに、教育現場の教師に尋ねたところ、台湾の大学における日本語学科の授業では、日中同形語を特に取り上げ、教えることはあまり行われていないということである。よって、学習者、教師双方の認識として、日中同形語は学校であまり教えていないと受け取られていることが判明した。

最後に、日中同形語の扱いについては、実際に日中同形語を教えるのはそう簡単ではないようであるが、もし、授業の中で日中同形語も取り上げ、本調査のアンケートのような練習問題を行うセッションを設けることができれば、学習者は関心を持ち、日中同形語の学習意欲がより高まると思われる。また、日中同形語を教える時、語単位で教えるだけでなく、文脈の中で教えれば、日中同形語に関する用法の認識を深めるとともに、誤用が減っていくと考えられる。

参考文献

- 王蜀豫 (1998) 『現代国語辞典』における同形語 『新潟大学国語国文学会誌』 40, 新潟大学, pp.1-11
- 王永全・小玉新次郎・許昌福 (2007) 『日中同形異義語辞典』 東方書店
- 大河内康憲 (1997) 「日本語と中国語の同形語」 『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版, pp.411-447
- 大塚秀明 (1990) 「日中同形語について」 『外国語教育論集』 12, 筑波大学, pp.327-337
- 奥谷道弘 (2005) 「台湾で使われる中国語の特徴に関する一考察—閩南語と標準中国語の“有”の使い方を比較して—」 『天理インターカルチャー研究所研究論叢』 第 13 号, 天理インターカルチャー研究所, pp.51-72
- 何宝年 (2011) 「「中日同形語」の定義」 『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会言語文化』 19, 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要編集委員会, pp.35-49
- 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のズレ—二字漢語の動詞性をめぐって—」 『一橋大学留学生センター紀要』 第 9 号, 一橋大学, pp.3-13
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異義語を対象に—」 『日本語科学』 第 23 号, 国書刊行会, pp.81-94
- 小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子 (2012) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得—中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較—」 『小出記念日本語教育研究会』 20, 小出記念日本語教育研究会, pp.49-60
- 三省堂 (2006) 『大辞林』 第 3 版, 三省堂
- 静宜大学日本語文学系 (2011) 『若葉の道』 台湾静宜大学日本語文学系
- 曾根博隆 (1988) 「日中同形語に関する基礎的考察」 『明治学院論叢』 424, 明治学院大学, pp.61-96
- 橘純信 (1994) 「現代中国語における中日同形語の占める割合」 『国際関係学部研究年報』 第 15 集, 日本大学国際関係学部, pp.99-106
- 陳毓敏 (2003) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の 4 タイプからの検討—」 『平成 15 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 社団法人日本語教育学会, pp.174-179
- 菱沼透 (1980) 「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例」 『日本語教育』 42, 日本語教育学会, pp.58-72
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』 文化庁
- 森岡文泉 (2001) 「台湾語 (国語) と中国語 (普通話) の比較研究 (3) —語彙を中心に—」 『国語国文論集』 (31), 安田女子大学日本文学科, pp.93-98
- 李愛華 (2006) 「中国人日本語学習者による漢語の意味習得—日中同形語を対象に—」 『筑波大学地域研究』 第 26 号, 筑波大学大学院地域研究科, pp.185-203